



## ふるさとで弾くピアノ

その1

### 「かやぶき屋根のコンサート」 青柳いづみこ(ピアニスト・文筆家)

私の母方の実家は兵庫県養父市八鹿町の、円山川沿いの小さな集落にある。ずっと母が管理していたが、その母も2008年に亡くなり、家は無人になった。江戸時代中期のかやぶき屋根の民家ということで、母の亡くなる三日前に県から重要文化財の指定を受けた。

母屋と離れがコの字型につながっていて、裏山を借景にした枯山水の庭園もある。



ご先祖さまは豊臣秀吉の山陰征伐の折りに滅ぼされた地方の豪族で、城主は山城に火をかけて自害し、乳母が幼子を連れて身をひそめた。ほとぼりがさめたころ集落に戻って百姓となつた。戦後の農地開放で多くの田畠を失つたが、祖母が家を守り、昔の外観のまま保存してきた。

私自身は東京の生まれだが、小学校三年生のころから、学校が休みになるたびに一人で帰り、休暇を祖母とともに過ごしたので、なつかしいふるさとのような感じがしている。といっても、ピアニストをめざす子供の日常はピアノとは切り離せない。小学生の間は近くの小学校の音楽室のピアノを貸してもらい、夏など汗だくになりながら練習した。中学生になると練習量が増えたため、町の楽器屋さんからアップライトのピアノを買って、離れの十畳の部屋に置いた。

大自然の中でのけいこは心地よかったが、山から降りてくるたっぷり湿気を含んだ風はピアノには大敵だ。何年もたたないうちにアクションの動きが悪くなり、あちこちに上がらない鍵盤ができてしまった。ハンマーに巻いたフェルトも湿気を吸ってふくらみ、ぼやけた音しか出せない。湿気対策をしようにも、土壁と障子の部屋では施す手がなく、結局このピアノは手放すことになった。

1980年にデビューしてからは、楽器屋さんからレンタルのピアノを運んでもらい、夏休みに「かやぶき屋根のコンサート」を開くことがあった。土間にむしろと座布団を敷いて客席がわりにし、店と呼ばれる座敷の間仕切りをとりはらった広大な空間にピアノを置く。ピアノのまわりにも座布団を敷いて、ちょうどステージの上の客席のようにセッティングする。

観客の多くは集落の人々である。お年寄りも子供たちも楽しめるようにと、ボール紙に絵を描いて語りを入れながらピアノを弾き、音楽紙芝居を上演することもあった。障子も開け放ち、客席から庭が眺められるようになっている。ときおり、大きなトンボがふらりと遊びにきたり、セミしぐれが伴奏してくれるのも風情があった。

ふるさとの家の土間には、いまだにこのころの手づくりポスターが貼つてある。

青柳いづみこ ピアニスト・文筆家。CDに『ドビュッシーの時間』『天使のピアノ』(いずれもカメラータ)。著書に『翼のはえた指』(白水社)で吉田秀和賞、『青柳瑞穂の生涯』(平凡社ライブラリー)で日本エッセイストクラブ賞。近著に『6本指のゴルベルク』(岩波書店)、『指先から感じるドビュッシー』(春秋社)。大阪音楽大学教授、青山学院大学講師。日本ショパン協会理事。オフィシャルHP: <http://ondine-i.net>